

国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財の保存修復に関する国際共同研究 (F03)	国際文化財保存修復協力センター	55
敦煌莫高窟壁画の保存修復研究 (E02)	修復技術部	56
龍門石窟の保存修復に関する調査研究 (F04)	国際文化財保存修復協力センター	57
中南米諸国文化財保存協力事業 (F05)	国際文化財保存修復協力センター	58
在外日本古美術品保存修復協力事業 (E05)	修復技術部	59
文化財保護に関する日独学术交流 (D04)	保存科学部	60
北米の文化財保存研究機関との国際研究交流 (D05)	保存科学部	61
アジア文化財保存セミナーの実施 (F06)	国際文化財保存修復協力センター	62
クンストカマーラ所蔵フィッセル・コレクション日本絵画調査 (B)	美術部	63

文化財の保存修復に関する国際共同研究

東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究 (F03-02-2/5)

目 的

タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム等東南アジア諸国の遺跡の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とするものである。当面はタイ国文化省芸術局との共同研究、および、カンボジア国のAPSARA（カンボジア政府アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構）との共同研究を軸に行っている。

成 果

カンボジアのアンコール遺跡群の保存修復プロジェクトについては、アンコール遺跡群のタ・ネイ（Ta Nei）遺跡を研究サイトとして「特に劣化の著しい部位の特殊環境の計測と解析」および「外観が著しく変化した石彫レリーフのクリーニングと保護処置」を行っている。2001年3月に当地に設置した無電源連続環境計測システムは順調に作動しており、2002年12月にデータの回収を行い、解析処理を行ってデータ集を作成した。この計測システムはコンピュータ制御の最新式のものであるが、その取り扱い方法をAPSARAの若い研究者に習得させるために、1名を東京文化財研究所に短期間招へいし研修を行った。当該研究者は基本技術を習得し、現在では計測システムの取り扱い全般についてほぼ任せられる状態となっている。表面に苔類、藻類、地衣類が着生し、また自然風化による変色が著しい石材の、ジェルパック法によるクリーニングとシリコン樹脂含浸による強化防水処置についての現地実験についても、材料を提供し、現地指導によりAPSARAの若手研究者に技術を教えて、彼らの手によって実験を進める方法で共同で研究を進めている。種々の変色について、システムチックな現地処理実験を進め、この処置の有効性が証明されつつある。実験結果は、定期的に画像を含めたメールで報告され、計画以上の成果が得られている。以上の国際共同研究の経緯と成果については、2002年12月9～10日にカンボジアのシェムリアップで開催された第7回バイヨンシンポジウム（Seventh Bayon Symposium）＜主催：日本国政府アンコール遺跡救済チーム、事務局：ユネスコ）と12～13日に行われたアンコール地域保護・開発国際調整委員会第12回技術委員会（Twelfth Technical Committee; International Coordinating Committee for the Safeguarding and Development of the Historic Sites of Angkor）＜主催：ユネスコ、共同議長国：日本・フランス＞で発表した。

日・タイ共同研究として、アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡をフィールドとした調査研究を行っている。アユタヤ遺跡のラチャプラナ寺院、スコータイ遺跡のスリサワイ寺院とスリチュム寺院における環境計測調査を継続して行っており、2001年12月～2002年12月のデータを解析してデータ集を作成した。スリチュム寺院大仏の保存修復処置後の経過観察と今後の保存計画策定のための調査研究を行っており、現地シミュレーション実験を進めている。パイロット事業としてのアユタヤ遺跡のマエナムプルエム寺院の修復については、周辺整備、構造補強、屋根替え、外装修復を終え、内部の修復に着手している。スリチュム寺院大仏の保存修復に関する成果と問題点については、スペインのマドリッドで開催されたICOMOS大会シンポジウムで発表した。

研究組織

西浦 忠輝、斎藤 英俊、二神 葉子、朽津 信明、岡田 健、
野口 英雄、友田 正彦、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復
協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、内田 昭人（修復技術部）



タ・ネイ遺跡における石材クリーニング実験

敦煌莫高窟壁画の保存修復研究 日中共同研究（E02-02-2/5）

目 的

敦煌莫高窟壁画の保存と修復技術の開発を目的として共同研究を行っている。53窟を実験フィールドとして修復記録管理システムの開発、壁画剥落止め材料の開発、壁画彩色技法の光学的調査方法の開発、修復用語集の編集などの研究を進めている。

概 要

平成14年7月、共同研究合意書の調印が敦煌研究院で行われ、4年計画の第4期共同研究が実施されることになった。第4期共同研究における実施項目は、壁画修復履歴管理システムの運用と改良、壁画修復材料の試験施工と改良、光学的方法による壁画彩色技法の調査方法に関する研究、壁画修復用語集の編集、53窟壁画修復の実施などである。

本年度は、修復実施を踏まえた壁画のデジタル写真撮影を行った。壁画全体の正射投影画像を作成するために基本写真の撮影、南壁および北壁の詳細写真の撮影を終了し、正射投影画像の作成を終了した。修復材料の検討については敦煌研究院職員と共に東京文化財研究所において天然系樹脂の日本製膠・ゼラチン、中国製膠・ゼラチンやウサギ膠などの表面張力、粘度、接着力などの試験を行った。光学的方法による壁画彩色技法の調査では、詳細なデジタル写真と赤外線、紫外線蛍光撮影などを行い、ラピスラズリから作られた顔料が特有の蛍光を発することなどがわかった。

<学会、研究会等での発表> 1件

中野照男ら 「敦煌莫高窟第53窟壁画の光学的調査」 敦煌莫高窟保存に関する研究会 敦煌研究院保存研究所
02.8.16

研究組織

青木 繁夫、森井 順之（以上、修復技術部）、中野 照男（美術部）、井手誠之輔、城野 誠治（以上、情報調整室）、岡田 健（国際文化財保存修復協力センター）



修復材料の試験施工



壁画顔料の接着に関する室内実験

龍門石窟の保存修復に関する調査研究 中国文化財保存修復に関する調査研究 (F04-02-2/5)

目 的

龍門石窟は中国三大石窟の一つに数えられる仏教石窟寺院である。北魏から宋時代までに2千余の大小仏龕が開かれ、仏像の数は10万体にのぼるといわれる。また造像銘記約2,800が現存しており書法芸術の宝庫としても知られている。これらの価値が評価されて、2001年12月にはユネスコにより世界文化遺産に登録された。しかし、この岩山はもともと無数の断層が走り、石質も場所によって精粗の差があり、風雪による温度・湿度の変化、断層を通過して洞窟内へ滲出してくる水など、長年にわたって厳しい自然環境にあったために、さまざまな傷みが生じている。加えて近年は、酸性雨の発生によって風化の進行は一層深刻な問題となっている。

この石窟の保護に協力するため、当研究所は財団法人文化財保護振興財団の援助を仰ぎ、2000年秋には龍門石窟を含む3者による石窟保護と共同研究に関する趣意書を作成、交換した。いっぽう2001年度からはユネスコ文化遺産保存日本信託基金による龍門石窟保存修復事業が始められ、日本側専門家兼ユネスコ・コンサルタントとしての役割も求められている。このような状況のもとに、2001年度を第1年目として、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の保護について、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。

成 果

・人材養成

龍門石窟研究院から毎年1名、保護研究室の研究員を受け入れ、長期研修を実施している。2002年度は、2人目の人材として2001年12月から国際協力事業団（JICA）の資金援助を受けて研修を続けていた高東亮氏が、9カ月間の日程を終了し8月末に無事帰国した。2003年1月からは、JICAの資金援助により新たに范子龍氏が9カ月間の研修に入った。長期研修とは別に、短期研修も実施している。今年度は3月16日から30日までの2週間、陳建平、馬朝龍両研究員を招へいし各種観測機器の使用に関する研修を行った。

・ユネスコ文化遺産保存日本信託基金

ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による龍門石窟保存修復事業は、ユネスコ、中国国家文物局、日本政府の共同によって推進されるもので、当研究所は日本側専門家兼ユネスコ・コンサルタントとして参加している。2002年度は、作業計画に基づき現地での測量調査、地質調査、および各種観測機器の設置が行われた。これに関連して当研究所は、各種観測のデータをより有効なものとするため、財団法人文化財保護振興財団に助成を要請し、自動地下水位温度計、定時観測用デジタルビデオカメラ、赤外線温度カメラ等を購入し、現地に設置してユネスコ事業に貢献した。

・画像データの収集と写真管理方法に関する共同研究

石窟の現状を記録し、石窟芸術の素晴らしさを多くの人びとに知らせ、同時に龍門石窟研究院における写真管理の方法を研究するため、両機関は共同で、5カ年をかけて主要洞窟の撮影を実施しようとしている。ただし2002年度に関しては、ユネスコ事業において選定した実験窟について詳細な画像データの収集が必要であるため、6月3週間、3月2週間の時間をかけ、北魏時代の皇甫公窟について約380カットの撮影を実施した。撮影は情報調整室城野誠治技術職員（美術写真）が担当した。第2年目以降は両機関独自の共同事業に戻り、他の主要洞窟について順次撮影を実施しようとしている。なお、この事業についても財団法人文化財保護振興財団の助成を受けている。

・李振剛院長の招へい

共同事業の円滑な運営をはかるため、文化庁の2002年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業により3月16日から23日の日程で李振剛龍門石窟研究院院長を招へいし、当研究所を視察していただくとともに、文化庁、外務省、東京藝術大学、財団法人文化財保護振興財団等を訪問し、今後の龍門石窟保護活動について意見を交換した。

研究組織

岡田 健、斎藤 英俊、西浦 忠輝、朽津 信明、稲葉 信子、二神 葉子、秋山 純子（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、中野 照男（美術部）、津田 豊（㈱ジオレスト）、中田 英史（㈱文化財保存計画協会）

パナマ歴史地区保存修復協力事業 中南米諸国文化財保存協力事業 第1期 (F05-02-2/5)

目 的

中南米諸国には、マヤ文明やアステカ文明の遺跡、スペイン植民地時代の中世都市など、世界的にみて価値の高い文化財が多く残されている。一方、これらの国々の遺跡や歴史的建造物は、木造・石造・レンガ造などであり、それらの多くは虫害、風化、劣化などによって文化財的価値が失われる危機に瀕している。東京文化財研究所は、これまでは主にアジアの文化遺産を中心に国際協力を実施し成果をあげているが、パナマ政府からの協力依頼を契機に、中南米諸国との研究協力を推進しようとするものである。

中南米諸国の専門家と協力して文化財保存修復に関して研究を行うことは、研究所のこれまでとは異なった地域における経験を豊富にし、研究の進展と普遍化に役立つとともに、相手国の専門家養成と専門知識及び技術の移転に関して効果的な国際貢献ができると期待される。

協力事業の対象となっているパナマ市歴史地区カスコ・アンティグオは17世紀末期に形成されたもので、3本の東西道路を軸とした碁盤目状の街区には、19世紀初期の独立以前のものを含めた数百の伝統的建築が並び立ち、多様な中にも統一感のある歴史的価値の高い地区であり、世界文化遺産として登録されている。

両国の協力事業をより円滑かつ広汎なものとするために、2002年2月、東京文化財研究所とパナマ文化庁は研究及び交流の合意書を取り交わした。

成 果

1) パナマ人専門家の招へい：パナマの文化財保存専門家1名を、2003年3月に16日間の日程で招へいした。招へい専門家は、重要文化財建造物の修理現場2か所（唐招提寺金堂・勝興寺本堂）重要伝統的建造物群保存地区5か所（京都市産寧坂・白川村荻町・上平村菅沼・平村相倉・川越市川越）、文化財保護制度の枠外にある京都の市民グループによる町家再生事業の現場などを訪問し、日本における不動産文化遺産の保存について、木造建築の保存修復の理念と方法の実際から、公的機関による文化財保護制度、市民参加による町家・町並み保存まで幅広く研修した。また招へい専門家には、東大寺や桂離宮など重要な歴史的建造物の見学を通じ、日本の建築文化の特質を理解してもらうことにも努めた。招へい専門家は、日本の木造建築の修復理念・方法の長所また日本の文化財保護制度の特質を十分に理解し、パナマの建築保存、とりわけ木造建築の保存修復に適用し得る基礎知識を習得した。

2) 都市保存に関する国際セミナーのパナマでの開催：歴史的都市の保存は地域内で人々が生活し経済活動を営んでいるという特質から、単体の建造物の保存に比べ、地域の文化的、経済的、政治的状況に影響を受ける度合いが大きく、また専門家に必要とされる職能も、個々の建造物の修復技術から一般市民への啓発活動まできわめて幅広くなっている。重要であるのは、これら地域で孤立しがちな専門家を支援し、情報交換を行うネットワークの存在であり、また彼らの日常業務に役立つ情報データベースの確立である。カスコ・アンティグオ地区の保存に携わるパナマ人専門家の人材育成、地区住民を含むパナマ市民の都市保存に関する啓発を第一の目的とし、また合わせて情報交換が少ないアジアと中南米の町並み保存の比較研究、両地域の専門家を繋ぐネットワークの確立に寄与するため、アジアと中南米の専門家をパナマに招へいし、都市保存に関する国際ワークショップをパナマ文化庁カスコ・アンティグオ保存事務所と共同で2003年3月26日から28日まで開催した。日本とパナマの他、フィリピン、シンガポール、メキシコ、コロンビアから専門家が参加し、各国の世界遺産都市の保存を中心に情報交換を行い、またカスコ・アンティグオを視察して同地区の保存について意見交換した。

研究組織

稲葉 信子、斎藤 英俊、西浦 忠輝、野口 英雄、宗田 好史、平賀 あまな（以上、国際文化財保存修復協力センター）松本 修自（奈良文化財研究所）、苅谷 勇雅（文化庁）

在外日本古美術品保存修復協力事業 (E05-02-2/5)

目 的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と協力して、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成3年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成9年度から工芸品など欧米の修復技術で修理の困難な分野にも協力対象を広げた。

この事業により修復した作品の公開によってわが国の修復技術に対する理解が深まり、修復技術の交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米に出張し、作品調査のほかには修復技術について所蔵博物館と討議し、併せて輸送の手続きについて協議を行っている。当研究所は修復内容の検討、修復作品の写真記録の作成および整理、保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業によって修復された作品の公開が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって日本古美術品に対する関心が高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に効果をあげている。

概 要

平成14年度は、継続修理を含む絵画7件、工芸品2件の作品を修復した。

< 絵画 >

海北友松筆「琴棋書画図屏風」	ネルソン・アトキンス美術館
伝狩野山楽筆「四季耕作図屏風」(田起こし)	ミネアポリス美術館
「地藏菩薩像」	大英博物館
「騎獅文殊菩薩像」	ベルリン東洋美術館
伝狩野山楽筆「四季耕作図屏風」(刈入れ)	ミネアポリス美術館
雲谷等益筆「林和靖陶淵明図屏風」	ハンブルク工芸美術館
「清水宇治図屏風」	ベルン歴史博物館

< 工芸品 >

「草花蒔絵鎌倉彫筆筒」	フィラデルフィア美術館
「兜(島津家)」	メトロポリタン美術館

また、以下の作品は2年の修理計画のうち1年目である。

「唐草螺鈿空穂」	メトロポリタン美術館
「移鞍(手向山神社旧蔵)」	メトロポリタン美術館
「源氏蒔絵螺鈿化粧箱」	バイエルン国立民族博物館

平成14年度、絵画の事前調査ではギメ美術館13件、ジェノバ東洋美術館38件、ケルン東洋美術館14件の作品の調査を行った。また、工芸品の事前調査ではクリーブランド美術館11件、ピーボディ・エセックス美術館10件の調査を行った。

平成13年度に実施された、絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。また、この事業の庶務を管理部および協力調整官、修復に関する調査・修復業務・報告書作成を修復技術部と美術部、写真記録の作成および整理業務を情報調整室がそれぞれ担当した。

< 報告書 > 1件

『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 平成14年度(絵画/工芸品)』 03.3

研究組織

青木 繁夫、加藤 寛(以上、修復技術部)、中野 照男、鈴木 廣之、勝木言一郎、津田 徹英(以上、美術部)、大塚 英明(協力調整官)、井手誠之輔、城野 誠治(以上、情報調整室)、斎藤 英俊(国際文化財保存修復協力センター)

文化財保護に関する日独学术交流 (D04-02-2/5)

目 的

日本とドイツの間では、昭和 49 (1974) 年に科学技術に関する学术交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学术交流が行われてきたが、平成 2 (1990) 年の第 13 回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学术交流」の提案があり、平成 4 (1992) 年から交流が開始された。本研究は日本とドイツ両国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

概 要

平成 11 (1999) 年度より「日本とドイツにおける歴史的彩色」の共同研究を行っているが、研究のまとめとして、ドイツの彩色技法との比較を念頭に置きながら、木彫像を中心に日本の彩色技法に関する文献翻訳を行った。翻訳した文献は、日本彫刻の歴史とその図像に関する概説、切り金などの装飾技法、顔料や下地の材料、日独共同で調査した彩色彫刻の研究結果など、約 10 編の文献である。これらの論文は日独共同研究報告書を出版するために編集集中で、現在ドイツ語訳がドイツ側で進行中である。この他、平成 15 年 (2003) 度からは石造文化財の保存に関する共同研究を始めることを計画しているので、ドレスデン工科大学と研究交流を行った。

研究組織

三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘 (以上、保存科学部)、津田 徹英 (美術部)、孫 喜山 (外国人特別研究員)



金銀箔による加飾
(アルトミュンスター教会、ドイツ、18 世紀)



ドレスデン工科大学における研究交流

北米の文化財保存研究機関との国際研究交流（ D05-02-2/5 ）

目 的

アメリカにはフリア・サックラー美術館が所属するスミソニアン研究機構やゲティ保存研究所があり、カナダにはカナダ保存研究所（CCI）などがある。世界を代表する文化財の研究機関が北米には所在している。それらの研究者と、文化財保存に関する国際研究交流を行うことを目的とする。

概 要

平成 14 年度は主にカナダ保存研究所との国際研究交流を行った。カナダ保存研究所は 1972 年にカナダ国内の文化財保存のために設立された研究所で、カナダ文化財局に所属している。職員数はおよそ 80 人で東京文化財研究所に類似した研究機関である。研究所では保存環境に関する研究を積極的に進めているだけでなく、その成果を生かして国内のみならず、現在はアメリカ国内、さらには世界中の博物館、美術館に対して保存のための助言や指導を行っている。

この 10 年の間に世界の博物館・美術館では、地球環境や人の健康を守るため大規模燻蒸を避けようとする気運が高まり、害虫の被害を未然に防ぐ予防対策や、大規模燻蒸以外の代替殺虫法の普及が進められている。我が国も 2004 年末に臭化メチルの全廃を控えているが、新しい生物被害防除法についてカナダ保存研究所で注目すべき研究を行っている。平成 14 年度には同研究所のトム・ストラング氏を招へいして、IPM（総合的害虫管理）や温度処理殺虫法についての研究交流を行った。

研究組織

○三浦 定俊、平尾 良光、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘、木川 りか（以上、保存科学部）



カナダ保存研究所トム・ストラング氏の講演



国立民族学博物館における研究討議

アジア文化財保存セミナーの実施 (F06-02-2/5)

アジア文化財保存セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行い、日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的として開催されている会議である。平成13年度から5カ年の時間をかけ、日本を含む9カ国の専門家が一堂に会し、各国における文化遺産保護の制度とその運用についての調査研究を行い、各国の文化遺産保護制度についての認識を広く共通のものとし、保護のための有効な理念の確立と、より強固な協力関係の構築をめざそうとしている。

文化遺産保護の制度とは、ひとつの国が国家としての枠組みを形成する過程で自国の文化に対する評価を行い、文化財とは何か、どこまでまもろうとするか、という基準を設定して、保護のための法律とそれを実施・監督する法律の整備と機構・体制の整備とを一体のものとして存在させる状態を言う。平成13年度に実施した第10回セミナーでは、各国から文化財保護に関する法律の内容とその成り立ちについての報告があった。これを受けた今回の第11回セミナーでは、機構・体制とその運用の状況について各国の報告を聞き、討論を行った。なお、当初参加を予定していた中国・清華大学の呂舟氏は国内で開催する国際シンポジウムのため出席できず、論文のみの参加となった。

日 時：平成14(2002)年11月11日～11月16日

会 場：東京文化財研究所会議室、出席者数：15名、テーマ：文化遺産の保護制度とその運用 組織、人、資金
報告と議論の主な内容：

1. 機構・組織：1) 国内の機構・組織の現状と機能、2) 他省庁との関係(特に環境開発、あるいは環境保護部門、また観光部門等との関わり)、3) 国際機関との関係、4) 他国機関との関係、5) NPO、NGOとの関係、6) 地域社会における住民の参加、個人のボランティア活動等との関係
2. 運用上の問題点：1) 指定、選定、認定、登録 その基準と方法、2) 規制、保護の手段(行政の責任、住民の義務、罰則、免税等の優遇措置等) 3) 資金(公的資金、援助等) 4) 継続性と人材養成(専門職の確立の度合、人材養成のための組織と制度)

日 程

11月11日～12日 スタディーツアー(岐阜県、富山県)

11月13日 セミナー第1日(東京文化財研究所)

11:00 開会式 挨拶 東京文化財研究所 渡邊明義

11:30 趣旨説明 東京文化財研究所 岡田健

14:00 「日本における文化財保護のための組織と運用」 東京文化財研究所 斎藤英俊

15:30 映像による日本の文化財保存の現状に関する解説

11月14日 セミナー第2日(東京文化財研究所)

10:30 「韓国における文化遺産管理システムと現在議論となっている話題」

国立中央博物館建立推進企劃團 金権九

11:30 「ベトナムにおける文化財保護システム」ベトナム文化情報省保存博物館局 グエン・クォック・フン

14:00 「文化遺産の保護制度と運用 組織、人材、資金 タイの事例」 タイ芸術総局 ピチャヤ・ブーンピノン

15:30 「文化遺産の保護制度と運用 組織、人材、資金 フィリピンの事例」

フィリピン国立歴史研究所 エメリタ・V・アルモサーラ

11月15日 セミナー第3日(東京文化財研究所)

10:30 「インドにおける文化遺産の管理」 インド世界記念物基金プログラムアドバイザー アミタ・ベイ

11:30 「スリランカにおける文化財の管理：概観」 スリランカ・ケラニア大学 ジャガス・ウィーラシンハ

14:00 「文化遺産の保護制度と運用 組織、人材、資金 イランの事例」

イラン文化財機構 アデル・ファランギ・シャベスタリ

11月16日 セミナー第4日(東京文化財研究所)

10:30 総合討議(1)(2)

15:30 閉会式

クンストカーメラ所蔵フィッセル・コレクション日本絵画調査 (B)

目 的

ロシア・サンクトペテルブルグにあるクンストカーメラはピョートル大帝によって設立された民族学博物館である。ここには多数の日本の品々が所蔵されている。今回は、その中で、1820年から29年まで長崎・出島のオランダ商館に勤務しシーボルトとともに活躍したオーフルメール・フィッセルの日本収集品に含まれる絵画全点について以下の作業を行う。

- 1) クンストカーメラの写真部がフィッセル・コレクションの日本絵画全点をデジタル撮影する。
- 2) 上記絵画全点について日露共同調査を行い、民俗学および美術史学の視点からコレクションの概説、作品解説などを付してCD-ROMを作成する。

概 要

これまでロシアに所在する日本美術品については、エルミタージュ美術館所蔵品を中心に調査が行われてきており、クンストカーメラ所蔵品についてはほとんど知られていなかった。このたびの調査によって、鎖国下の日本において長崎・出島のオランダ商館につとめたフィッセルの日本収集品に含まれる日本絵画のリストが作成され、全点のデジタル画像が撮影された。また、2002年9月29日から10月10日まで同館において、日本民族資料担当であるアレクサンダー・シニーツィン氏との共同調査を行い、その成果に基づいてコレクションの概要、主要作品解説などを伴ったCD-ROMが作成された。

調査結果の一部は『美術研究』においても公にされた(107頁参照)。

研究組織

山梨絵美子(美術部)

備 考

この調査・研究は2002年度の国際交流基金の「日本研究リサーチ・会議等助成プログラム」による助成を受け、クンストカーメラからの依頼により行われた。



クンストカーメラ所蔵 川原慶賀「日本人の一生 宮参り」(絹本・着色 19世紀)

A.N.Tikhomirov 氏撮影 cMAE RAN (Kunstkamera) 